

◆書評特集趣旨説明◆

## 『犬からみた人類史』書評コロキウム：はじめに

### Introduction to Book review colloquium on the book *Human History from Dog's Perspective*, Bensei Publishing 2019

大石 高典  
OISHI TAKANORI

東京外国語大学現代アフリカ地域研究センター  
Tokyo University of Foreign Studies, African Studies Center

原稿受理日：2020.1.31.  
*Quadrante*, No.22 (2020), pp.117-119.

この特集は、2019年10月1日に東京外国語大学海外事情研究所でおこなった『犬からみた人類史』（勉強出版、2019年）<sup>1</sup> についての書評会の記録である。当日は延べ20名の参加者を得た。3人の評者からの批評を受けて、3人の編者が応答を行い、その後会場に開いて質疑応答をおこなった。そこで議論を踏まえて、発表者に当日の発表を論考の形にいただいた。

『犬からみた人類史』は人類最初の家畜である犬に着目し、その犬の視点から人類史を捉えなおそうとする。犬と人類がともに暮らすようになった歴史はおおよそ2~5万年程度と、人類進化の歴史全体の中では比較的最近のことである。しかしその数万年の間に両者は最も身近なパートナーとして関係を築いてきた。犬は、人の社会の内に深く入り込みながら人ではない、という不思議な存在になっている。アンビバレンスをはらんだ犬と人の間の微妙な距離感の揺れ。そこから生まれる視差を使って、人類史を捉えなおしてみたらというのが本書のもととなったアイデアである。

中部アフリカ、内陸アラスカ、中米をフィールドにする共編者の人類学者3人は、2016

年から2018年にかけて動物行動学、動物心理学、動物考古学、民俗学、現役の狩猟者など20人の共同研究者とともに議論を重ねた。その結果を、犬と人の関わりが始まりに焦点を当てる「第一部：犬革命」、関係の多様化を見る「第二部：犬と人の社会史」、犬と人のこれからのに向けた想像力を試す「第三部：犬と人の未来学」の3部構成にまとめた。本全体では、地球上に遍在する犬に着目することで、その犬と「共生」関係を築いてきた「人」の環境と生業、近代、実存についても掘り下げる内容になっている。

この後に掲載する評とリプライ・コメントでは、本書の各章・コラムについて数多く言及がある。すべてに概要を付けることは紙幅の都合でできないし、本の序章に詳しい要約を載せてあるので手っ取り早く全体像を知りたい方はまずそちらを参照されたい。ここでは、読み進めるうえで最低限必要と思われる目次を抜き出しておくにとどめたい。

序章 犬革命宣言——犬から人類史をみる  
第1部：犬革命

<sup>1</sup> 大石高典・近藤祉秋・池田光穂編『犬からみた人類史』2019年5月初版刊行、A5判・並製、480頁。定価：3800円（+税）ISBN: 978-4-585-23070-0



『犬からみた人類史』書評コロキウム：はじめに

第1章 イヌはなぜ吠えるか—牧畜とイヌ(藪田慎司)

第2章 犬を使用する狩猟法(犬猟)の人類史(池谷和信)

第3章 動物考古学からみた縄文時代のイヌ(小宮孟)

第4章 犬の性格を遺伝子からみる(村山美穂)

第5章 イヌとヒトをつなぐ眼(今野晃嗣)

第6章 犬祖神話と動物観(山田仁史)

【コラム1】文明と野生の境界を行き来するイヌのイメージ(石倉敏明)

【コラム2】人と関わりをもたない犬?—オーストラリア先住民アボリジニとディンゴ(平野智佳子)

第2部：犬と人の社会史

第7章 カメルーンのパカ・ピグミーにおける犬をめぐる社会関係とトレーニング(大石高典)

第8章 猟犬の死をめぐる考察—宮崎県椎葉村における猟師と猟犬の接触領域に着目して(合原織部)

第9章 御猟場と見切り猟—猟法と犬利用の歴史的変遷(大道良太)

第10章 「聞く犬」の誕生—内陸アラスカにおける人と犬の百年(近藤祉秋)

第11章 樺太アイヌのヌソ(犬ぞり)(北原次郎太)

第12章 忠犬ハチ公と軍犬(溝口元)

第13章 紀州犬における犬種の「合成」と衰退—日本犬とはなんだったのか(志村真幸)

第14章 狩猟者から見た日本の狩猟犬事情(大道良太)

【コラム3】南方熊楠と犬—「犬に関する民俗と伝説」を中心に(志村真幸)

第3部：犬と人の未来学

第15章 境界で吠える犬たち—人類学と小

説のあいだで(菅原和孝)

第16章 葬られた犬—その心意と歴史的変遷(加藤秀雄)

第17章 犬をパートナーとすること—ドイツにおける動物性愛者のセクシュアリティ(濱野千尋)

第18章 ブータンの街角にたむろするイヌたち(小林舞・湯本貴和)

第19章 イヌとニンゲンの〈共存〉についての覚え書き(池田光穂)

【コラム4】イヌのアトピー性皮膚炎(牛山美穂)

【コラム5】シカ肉ドッグフードからみる人獣共通のウェルビーイング(立澤史郎・近藤祉秋)

あとがき

執筆者一覧

索引

グロッサリー

書評会を企画するにあたって、野生動物保護管理の実務経験をお持ちで現役獣医学生である村上正樹さん(日本獣医生命科学大学獣医学部)、文化人類学の視点から日本における人とクマの関係の研究に取り組んでいる松本朋華さん(東京外国語大学大学院総合国際学研究所修士課程)、そして歴史学の立場から人と動物の関係史を研究されている伊東剛史さん(東京外国語大学大学院総合国際学研究院)に評者を引き受けていただいた。伊東さん以外の2人はそれぞれ学部と修士課程の学生だが、アプローチは異なるものの、これから人と動物の関係に職業として関わろうとしている若者が本書をどう読んだのかを知りたくてお願いした。また本特集を編むにあたって、書評会に参加くださった本書編集者の福井幸さんにもご寄稿をいただくことにした。本書を編集するなかで得られた経験や発見について、編者とは違う視点から書いてくださっている。

最後に、本特集を編むにあたり本書評会の実現にご協力・ご助言をくださった同僚の小田原琳さんと、会場を提供くださった東京外国語大学海外事情研究所に感謝したい。